

包摂的「常民」概念の可能性

——マイノリティによる芸術活動を読み解く——

Possibility of the Inclusive “Joumin” Concept:
Decipher from Artistic Activities by Minorities

荒木 生

キーワード：マイノリティ, クィア理論, 常民, 芸術, 再構築

This paper aims to extend the concept of “*Joumin*” (common people), to include sexual/racial/ethnic minorities and other cultures in folk culture studies. Because they are also “*Joumin*” who live every day through their practices and folk, who are bearers of their unique traditions, and who constitute an aspect of the culture in this society.

Folk culture studies have a role in deciphering the lives, thoughts and practices as folk of the common people. From varied cultures in society and reconstructing existing history using the life and culture of the common people. Folk, Culture and tradition in contemporary society can be more deeply captured by regarding people considered marginalized minorities of outside the dominant culture as “*Joumin*”. The minority’s cultures and lives in art. Therefore, it is necessary to read, analyze and examine vernacular knowledge and experiences from the art they produce.

To do this, queer theory is helpful. Queer theory avoids the problem of one-sided objectification of those outside the dominant culture and provides another perspective from marginalized communities, a perspective different

from the dominant norms.

This paper discusses the need to regard minorities outside the dominant culture as “*Joumin*”, the common people, in contemporary society and to decipher those cultures through their art, and the possibilities for developing folk culture studies and resolving their marginalization through the introduction of queer theory, from the case studies of artistic activities by sexual/racial/ethnic minorities.

目次

はじめに

I マイノリティと「常民」

1 「常民」概念を拡張する

2 民俗としての芸術

II マイノリティによる芸術

1 性的マイノリティ

2 人種・民族的マイノリティ

III 考察

1 規範の再構築

2 クィア理論から読み解く

おわりに

はじめに

本稿は、近年の社会的・文化的状況の変化と研究動向を考慮し、現代社会における社会的・文化的なマイノリティの民俗を日本の社会・文化研究の中に位置付けることを試みるものである。合わせて、「常民」概念の拡張の可能性を提示するものである。

マイノリティの視点から今日の「常民」概念を拡張する必要があることに

については、筆者自身が性的マイノリティのコミュニティと人種・民族的マイノリティのコミュニティの両方に属しながら日々を生きる中で切実に感じたことである。この考えは、筆者が個人としてそれらのコミュニティに属しながら、研究者としてはフィールドワークを行い文化人類学の観点から研究する中で、民俗研究において、周縁化されたマイノリティとされる人々もまたこの社会で共に社会を構築し文化を育んでいる生活者であると感じていたことに起因する。

近年、性的マイノリティや人種・民族的マイノリティへの社会的認知が進み、マイノリティ当事者による社会・文化活動も盛んになり、様々な意味でこうした人々が注目を集める機会が増え始めている。このような現状に鑑み、本稿は、マイノリティとされる人々の視点から「常民」概念を拡張する必要性を論じ、マイノリティの文化や生活実践を民俗研究の中に位置付けることを試みる。その際、今までの研究枠組みに加えて、クィア理論の導入の必要性を論じる。換言するならば、本稿は、マイノリティの民俗を以って「常民」概念を拡張し、その上でクィア理論を用いて民俗史の再構築を試み、それを通して既存のマジョリティ中心の歴史をさらに再構築する可能性を探る。本稿の試みは、新たな民俗史の可能性を拓くものになると筆者は考えている。

本稿では主に、筆者の研究分野に関連する性的マイノリティと人種・民族的マイノリティの活動の事例を扱うものとする。

以下、第Ⅰ章では、マイノリティと「常民」概念について研究史を概観し、民俗が芸術にも置換されていることを確認する。第Ⅱ章では、近年特に顕著となりつつあるマイノリティによる芸術活動について事例を紹介する。第Ⅲ章では、マイノリティによる民俗実践として芸術活動の作用を規範への再構築の試みとして考察し、クィア理論に基づく分析の有効性について述べる。

I マイノリティと「常民」

1 「常民」概念を拡張する

「常民」とは、日本民俗学の用語で、民間伝承を保持している人々を一般的

に指すとされる [佐野 2008]。また、民俗学においては重い役割を担わされているものの、一般には「庶民」や「民衆」の代替物として使われ、専門の民俗学者の間でも不明瞭な概念と理解されている概念であり、ときとして集合名詞の側面も強く持つが、それぞれの条件下における知恵と判断を持つ人々を指す場合もある、とされる [鳥越 2001 : 36, 48]。

日本の民俗研究は、柳田國男による「サンカ」や「所謂特殊部落」の研究や折口信夫の『被差別の民俗学』を始めとし、これまでも芸能者や被差別者を含め社会から異端とされ周縁化された人々を扱ってきた。柳田は被差別者を「非常民」とするが（柳田『被差別民とはなにか 非常民の民俗学』）、彼らもまた社会においてそれぞれ日常生活を行う民であり、被差別者など周縁化された人々を包摂した視点を持つ民俗史もまた学界そして在野で研究されている [礪川 2006a]。

「常民」とは、特定の伝承を持つ人々や文化そのものを指す、統一見解のない概念であると認識可能なはずである。この社会で共に文化や伝承を育む生活者を広義の「常民」とするならば、社会から周縁化された社会的・文化的な少数者であるマイノリティの個人あるいはコミュニティの中にも文化と生活実践が息づいていることから、マイノリティもまた「常民」と言えるはずである。従って、マイノリティの視点から「常民」の拡張あるいは再構築を模索し、周縁化されたマイノリティの生活実践を以て既存の歴史を構築し直そうとする試みは、民俗史が対象とする社会に生きる人々をより詳細に捉えるための試みとして学問的意義があるといえるだろう。

日本の性的マイノリティ研究は、砂川秀樹によるゲイ・コミュニティの文化人類学的研究 [砂川 2015] や、礪川全次の同性愛の風俗史研究 [礪川 2006b]、赤枝香奈子や杉浦郁子による女性同性愛の歴史的研究 [赤枝 2011] [杉浦 2015]、堀江友里によるレズビアンアイデンティティとコミュニティ形成にかかる社会学的研究 [堀江 2015]、三橋順子によるトランスジェンダーの文化史 [三橋 2022] など、すでに多様な蓄積がある。また、人種・民族的マイノリティ研究は、曾士才による日本の華僑社会の文化人類学的研究 [曾 2020] や、石原真衣による日本の先住民族であるアイヌのオートエスノグラ

フィ研究 [石原 2020]、金子遊や下地ローレンス吉孝による混血の社会史研究 [金子 2018] [下地 2018] など、こちらも様々な蓄積がある。

以上に列挙したように、マイノリティの当事者あるいはコミュニティが築いた文化や歴史を、日本の社会や歴史と関連付けることでその意味と意義を考察し、マイノリティ当事者やコミュニティの抱える困難解消に寄与し、マジョリティのみを中心とした既存の歴史を再構築する研究は着々と行われてきた。マイノリティの民俗を研究する際には、こうした研究史を踏まえる必要がある。そして、マイノリティの対象化がはらむ暴力性や、マイノリティとマジョリティ間にある格差、社会に存在している差別構造を不可視化または矮小化してしまう危険性、多様なマイノリティの差異を不可視化しマジョリティに同化してしまう危険性などに十分に注意を払う必要がある。その上で、マイノリティを日本社会の歴史と「関連付ける」という段階から進め、マイノリティの視点から「常民」を捉え直す民俗研究がさらに必要であると、筆者は考える。

日本においては、女性民俗学研究会（「女の会」）が1940年代後半に立ち上げられ、およそ1950年代には社会的にマイノリティである「女性」という属性が積極的に民俗史に位置付けられ始めた。しかし、高度経済成長期の中で庶民の生活文化が激変した1980年代には、新たな女性研究が必要との問題提起があれども、変化を捉える民俗学的視点が不十分であったとされ、女性集団あるいは女性個人の生活実践にまつわる文化を民俗史に位置付けるために女性学の視座の導入が必要とされた [靄 2015: 18, 19]。こうした研究史の上に、家庭（イエ）における主婦の研究だけでなく、女学生や「キャリア・ウーマン」を対象とした研究、女性の趣味活動や政治活動などの研究が蓄積され、歴史的に長らく不可視化されてきた女性たちの人生が「常民」の生活実践の一つとして民俗史の範囲となり、フェミニズムの理論が研究の分析に使用されるようになって久しい。これは、民俗研究がフェミニズムを導入したことで新たな展開を果たした部分であるといえるだろう。

女性を「常民」の中に改めて包摂することで民俗研究が新たな展開を果たしたことと同じように、現代社会においてマイノリティとされる人々の日常

の生活や実践、あるいはマイノリティ・コミュニティに根付く伝統や生きていくための知恵を、民俗研究に包摂する必要があると筆者は考える。マイノリティの生活実践という民俗もまた、この社会を共に生き構成する生活者、すなわち「常民」による歴史の実態の一つだからである。

2 民俗としての芸術

民俗とは、「人々の生活習慣である。生活の中の経済・宗教・藝能などの諸側面における慣習と伝承である」[新谷 2022: 83]とされる。そして、「具体像は研究者によってかなり相違があり、けっして一枚岩的な表象ではない」[岩本 2022: 182]という側面も民俗は待ち合わせている。これらの言及から、民俗は定義が難しいものの人々の生活に息づき、人々は民俗を担っていると考えることができる。そして、そうした人々の民俗の歴史が民俗史であると認識できるだろう。

社会的・文化的マイノリティの民俗は、時に法的に規制され、現代社会に広く流布することや保全されることがかなわなかったものも存在する。そして現在も、マイノリティの文化や生活実践は広く認知されているとはいえない。しかし、認知の有無とは関係なく、マイノリティの民俗はこの社会を生きる当事者の生活そのものやコミュニティに存在している。そして、マイノリティの民俗もまた多くの民俗と同じように、当事者によって絵画や音楽または小説などの芸術活動にも落とし込まれている。マイノリティの民俗を掬い上げるには、フィールドワークに加え、当事者目線でそうした芸術の意味や意義を読み解くことが必要である。

マイノリティの民俗を芸術活動から読み解き民俗史に位置付ける試みとして、アメリカ民俗学の事例である米インディアナ大学が出版した“Advancing Folkloristics” (2021) に掲載されていた研究を以下に紹介する。

2015年、ブルックリン美術館において開催された大規模な展覧会「Kehinde Wiley: A New Republic」は、ゲイの黒人肖像画家として活動する Kehinde Wiley による作品展である。ごく普通の一般人たる労働者であるアフロ・アメリカン（アフリカ系アメリカ人）の人々、またはアフロ・アメリカンかつ

性的マイノリティである人々の肖像画を西洋の古典的な技法で描いた作品たちが展示された。描かれた人々の服装は普段着であり、背景の柄や調度品は個人の必需品やコミュニティのアイコン的アイテム、ヒップホップ・カルチャーに関連する物などに置き換えられている。これらの作品は西洋の伝統的な絵画の形態を意図的に模倣した構成になっており、それは西洋の王侯貴族などを含むブルジョワたちのための物であった肖像画を、ブルジョワが作り出した規範と社会によって下位に位置付けられたマイノリティが換骨奪胎してみせるという目的がある¹⁾。性的マイノリティそして人種・民族的マイノリティの生活つまり民俗を描いた作品が並んだこの展示会は、アメリカ民俗を表象するものとして制作・企画され、鑑賞された。アメリカ民俗学はこの展示を、アメリカの民俗をマイノリティを包摂して拡張するものとして分析しているのである [Turner 2011]。

日本においてもマイノリティによる芸術は次々と発信され続けており、個人やコミュニティの生活圏を超えて社会一般に流通している。日本の民俗も、すでに日本社会を生きている様々なマイノリティの民俗と一続きなのである。

次章では、現代の日本におけるマイノリティによる芸術について事例を踏まえてみていく。

II マイノリティによる芸術

この章では、マイノリティによる芸術活動について、第1節では性的マイノリティ、第2節では人種・民族的マイノリティのものに焦点を絞り、事例を挙げる。

1 性的マイノリティ

事例1

2022年、クラウドファンディングによって日本での出版が決定した『おばあちゃんのガールフレンド』は、高齢レズビアンたちの物語である。企画責任者である略飛（台湾のLGBT運動を主導する団体の一つ、台湾同志ホット

ライン協会創設者・理事長)は、日本での出版にあたり、以下のコメント²⁾を寄せた。

「同志 (LGBTQ) 運動が進めているのは、社会とコミュニケーションを図り、性的少数者が平等な権利を必要とする理由を一般の人々に理解してもらうことです。コミュニケーションの方法は専門書に限らず、物語も理解を促進するための優れた方法です。性的少数者は社会的な圧力によりカミングアウトが困難なため、一般の人々は日常生活の中で彼ら彼女らの真の姿を知る機会がありません」

「同志コミュニティは主流社会のリソースを欠き、社会的状況の不利な立場にあります。同志の平等な権利を勝ち取ろうとするとき、私たちが手にする最強の武器は、まさに書くことなのです。物語を書くことは、同志運動に参加するための重要なプロセスであり、アフターマティブアクションの完成を目指して積み上げていくべき手段でもあるのです」

このコメントから、マイノリティにとっての表現活動が、不可視化に抗い自身の日常生活を伝える手段であること、日々の生活と経験を「物語」にして「書くこと」が、マイノリティのコミュニティで生存のための知恵として伝承されていることが理解できる。マイノリティの民俗が表現に落とし込まれている理由の一つと考えられるだろう。

事例 2

2022年に日本で発行された『イン・クィア・タイム』は、アジアの性的マイノリティの作家たちによる「クィアな」(性的マイノリティ性の強い)作品を集めたアンソロジーである。この本の前書き [イン 2022] は以下である。

「私たちの創造性、多様性、そして葛藤を表現した作品は、多くの言語やジャンルで無数に存在しています。しかし、この本はきっと重要であると信じています。単に本当に推せる読み物だからというだけでなく、本書そ

のものがコミュニティを構築してくれると信じているからです。(中略)そして読者のうちで、カムアウトできる環境でなく、政府や社会から抑圧されたり、受け入れてもらえずに苦しいと感じている多くの人々へ。ぜひ、この本に慰めと安らぎを見出しいただき、少なくともあなたは1人でないと思出ししてほしいと思います」

これに加え、レズビアンであることを公表している日本の作家、王谷晶はこの本の発行にあたり以下のコメントを寄せた。

「ここに居るんだ」と言わなければ、居ないことにされてしまう人々がいる。「こんなことがあったんだ」と伝えなければ、無かったことにされてしまう日常がある。「これがわたしたちの普通なんだ」と叫ばなければ、ほかの普通に飲み込まれ消されてしまう人生がある。この物語たちから溢れる声に、今はただ耳を傾けてほしい」

これらの文章からは、マイノリティ当事者による芸術表現は、同じマイノリティへの連帯として機能し、その芸術を基盤にしたコミュニティが構築され得ることが示されている。周縁化されがちな属性にとって、世に出された同じ属性の当事者による芸術は一つの表徴となり、それを起点として同じ伝承を有する者同士のコミュニティが形成されるという、マイノリティ民俗史の一面をここから読み取ることが可能である。そして、マイノリティたちの「普通」の人生、マイノリティの民俗史が、芸術に置換されていることが確認できる。

事例3

2022年6月26日にMBS放送から放送されたドキュメンタリー番組『93歳のゲイ〜厳しい時代を生き抜いて〜』では、今年93歳になる“長谷さん”が初めてカミングアウトする様子が映された。“長谷さん”は、同性愛が犯罪化や病理化されたり差別されたりする中、ペンネームを使って詩や小説を書

き、そこに自分をさらけ出してきたと言う。そして、今でも俳句や短歌を「自分が生きてきた痕跡を残すため」に書き続けていると述べた。

存在表明が難しく、存在を否定される社会においては、マイノリティは歴史を有することが困難である。しかし、マイノリティはそうした社会の中で芸術の中に自身の生活を残してきたことを、“長谷さん”の語りは示唆している。マイノリティによる芸術を読み解くことは、歴史的に隠されてきたマイノリティの民俗史を過去へ遡って理解すること、あるいは、マイノリティは初めからこの社会に存在していたのだと再確認することでもあるのである。

事例 4

田亀源五郎による漫画『弟の夫』（2014-2017 連載）は、2018年にNHKでドラマ化し放送されたこともある作品である。本作は、小学生の一人娘と二人で暮らす男性・弥一のもとに、逝去した弥一の弟とカナダで結婚していたゲイ男性・マイクが訪れることから始まる物語である。主人公の弥一がマイクや娘とのコミュニケーションを通じて、弟夫夫（ふうふ）そして性的マイノリティに対する理解を深めていく様が描写される。

田亀はゲイ・エロテック・アーティストとして日本のゲイ・カルチャーを漫画の分野で牽引してきたゲイ当事者の一人であり、本作は田亀の初の一般向け作品の単行本である。本作の執筆を振り返り、田亀は以下のように述べる。

「怒りを読み取ってくださった読書の方もいて、それも嬉しかったです。もちろん優しく感じたとか泣いたという反応も嬉しいのですが、優しさに包まれたこの作品の、その奥底に流れているものを感じ取っていただけたことが嬉しかったです。大げさなことを言うと、私は世界を変えたいと思っている人間なので、作品を描くときにもその気持ちが湧いてくるようなところがあるのですが、その部分を感じてもらえたと言う事ですね」[田亀 2017]

マイノリティによる芸術には、当事者の生活だけでなく、その生活をする当事者としての感情（この場合は「怒り」）や思考（「世界を変えたい」）が内

包されていることが確認できる。芸術には、当事者の生活実践だけでなく、当事者が何を感じ何を考えているのかという感情・思考も落とし込まれている。今を生きる人々の感情や思考もまた、人々の生活習慣であり、目に見えない無形のものではあるが民俗を構成する要素である。芸術には表現者の感情や思考を観賞者に可視化する機能があり、マイノリティによる芸術からマイノリティの民俗における実践と思想の側面を読み取ることが可能である。

事例 5

2021年公開の映画『片袖の魚』はトランスジェンダーの女性を主人公としたドラマである。本作では、日本初となるトランスジェンダー女性当事者を対象とした俳優オーディションが開催され、トランスジェンダーの役をトランスジェンダーの当事者たちが演じている。主演女優のイシヅカユウは、トランス女性の当事者として、「自分自身の弱さに目を向けずに生きてきた私にとってこの映画は、弱かった自分を思い出させてくれて、さらに今までの生きてきた時間を肯定してくれるような作品でした。そして芸術的な画と音で今の私の背中を押してくれました」と語る³⁾。

マイノリティの当事者による生活実践が落とし込まれた芸術は、表現者として製作過程で自身の人生と向き合い肯定するきっかけを得られ、鑑賞者としては鑑賞後の人生を歩む力を得られると推察できる。芸術に昇華されたマイノリティ当事者の生活実践は、マイノリティの生活を社会の中で可視化するという存在表明として働き、表現者と鑑賞者共に存在を「肯定」され「背中を押される」機会として働き得る。マイノリティにとって（人によっては出会ったこともない）自分と同じ属性の人物のリアルな生活を体験することで知ることが、今後の人生の実現可能性を高める経験として有されると考えられる。

以上のことから、マイノリティにとって自身の生活を芸術に落とし込み表現することは、周縁化され不可視化されがちな自身の生活の実態を世界に遺す営みであり、コミュニティ内に向けた連帯と鼓舞の声を発するための行為

であることが読み取れる。そして同時に、コミュニティの外つまり社会へ向けての存在表明となり、人々へ自分たちの民俗を伝える手段として認識されていることがわかる。

2 人種・民族的マイノリティ

事例 1

2019年12月、雑誌『美術手帖』は「「移民」の美術」という特集号を発刊する。その中の「在日朝鮮人美術の歴史」では、在日朝鮮人美術が1961年の時点で日本美術会の画家から「作者たちの生活に対する探究のパスであり民衆が求めているものへの共感の切実さを覚えた」と日本の生活者による表現としての文脈で評価されていたことに触れている。解説を務めた白凜は、在日朝鮮人美術史の展開について「在日朝鮮人の美術のルーツであると同時に、当たり前ですが、日本の美術の一樣相です」と述べている [白 2019]。

この記述は、マイノリティによる芸術が「作者たちの生活」を落とし込んだ「切実」なものであること、そして、マイノリティの歴史がマジョリティの歴史の一樣相でもあることを簡潔に示している。この社会に存在する周縁化されたマイノリティによる芸術は、マイノリティの民俗を含有する。それはマジョリティの歴史には存在しないことになっているが、実際は表裏一体の歴史として分かち難く結び付いている。

事例 2

2016年1月、日本の華僑・肖金徳により、中日両国の芸術家の水墨画作品を専門的に展示する日本で初めての芸術空間 SHANBARA 画廊が東京に設立された。画廊初の展覧会では、日本の「もの派」のリーダーである保科豊巳の水墨画作品が展示された。保科は、芸術について次のように語る。

「芸術の創作は温故知新、つまり過去の芸術家の創作環境や創作状態を深く理解し、学習し、体験することで、新しさを理解し、現代芸術家の思想を生み出すことができる」⁴⁾

芸術は、作品を注意深く読み解くことで作者の「創作環境や創作状態を深く理解し、学習し、体験する」ことが可能な媒体であると保科は述べる。それはつまり、芸術を通すことで、人は共に社会を生きる様々な他者の生活を掬い上げることが出来るということである。

事例 3

漫画『バクちゃん』は2019年から2020年にかけて連載されており、連載のプロトタイプにあたるオリジナル版は第21回文化庁メディア芸術祭のマンガ部門で新人賞を受賞している。本作は作者の増村十七が移民として生活していた期間の体験に基づいて作られたSF作品である。増村は本作の制作動機を「生活へのリアクションとして、今の状況を叫び出したい気持ちで描きました」と語る。作中で反響のあったシーンとして、地球へ移民してきた異星人が「地球好き？」と聞かれて「選択肢 ないよ（ノーチョイス）」と返すシーンを挙げた。このシーンは作者自身が難民の女性と会話した際のやりとりをそのまま描写したと言い、「読者からも大きな反響がありました。日本で暮らしている人の多くは、こうした声を知る機会がないので、驚きだったのかなと思います」と述べた⁵⁾。

この語りから、日本で暮らす人々の多くが、移民・難民という人種・民族的マイノリティの生活実践を認知していないという現状が読み取れる。しかし、芸術を通し、人種・民族的マイノリティの日常を描くことは、マイノリティにも当然ながら生活実践があり文化を持っていることと、そうした文化が実はすでに日本に流れ込んでいること、そしてそれが日本の民俗の一側面としてすでに存在していることを、物語を通して明らかにする。そして、その物語に触れた者に、日本の民俗の実態を知る手がかりを託すのである。

事例 4

2022年に発売された『KOMPU SATKE MENOKO』（昆布干し女）は、バンド“キウイとパイヤ、マンゴーズ”とヴォーカルユニット“アペトゥンペ”のコラボ曲であり、既存のアイヌ語歌謡をシティ・ポップ調にアレンジ

した曲である。メインボーカルとして参加するアペトゥンペは、アイヌの伝統歌「ウボポ」の再生と伝承をテーマに活動する姉妹ヴォーカルユニットである。公式ホームページ⁶⁾では、この曲を以下のように紹介している。

「昆布を干す女も、熊を狩る男も、あの頃には当たり前隣にいた。2022年の今、隣にいるのは、ちょっぴりアーバンになった二人。あの日の二人は喜んでくれているだろうか？」

「ともすれば「民族音楽」として括られがちなアイヌ歌謡の偏ったイメージを裏切る一曲となった」

「レア・グルーヴマニアならずとも、皆で歌って踊れるアイヌ語と日本語…日本列島の風通しの良いダンスミュージックとして、明治生まれのアイヌ女性が歌った歌が令和のダンスフロアに蘇る」

上記の文章では、日本国内で自国の音楽を除外した他者の音楽として向けられる「民族音楽」というアイヌ歌謡への「偏ったイメージ」を、シティ・ポップ調アレンジが「裏切る」と書かれている。この記述から、この曲が現代のダンスミュージックであるという音楽性と共に、他者化への抵抗の姿勢を有していることが認識できる。他者の音楽ではなく「日本列島の」音楽でもあることを、シティポップ調アレンジによる現代日本のダンスフロアという文脈を通すことで明らかにしているのである。アイヌは日本における人種・民族的マイノリティであるが、アイヌ歌謡の「昆布干し歌」が作られた明治期の「あの頃」も、それをシティ・ポップ調にアレンジの本作が発売された「2022年の今」も、日本において「当たり前隣にいた／いる」人なのだとこの記述は示している。

ここでは、コミュニティの文化を再生・伝承することで同化に抗いつつ、他者化というステレオタイプを揺るがす、そうしたマイノリティの実践に基づく民俗が、「わたしたち」の民俗史として芸術を通して提示されている。

事例 5

ALIは、メンバー全員が日本と他国（アメリカ、イギリス、イタリア、インドネシア、オランダ、ガーナ、カメルーン、スペイン、ハワイ、フランスなど）にルーツを持つ、東京は渋谷発の「多国籍ファンク&ヒップホップバンド」である。インタビュー⁷⁾において、リーダーのLEOはALIというバンドを「ハーフが集まって、古いやつも新しいやつも、いろんな育ちのやつも共存してる感じが、東京っぽいバンドだと思ってます」と語り、その理由を「東京って、戦争中に空襲で一度ぶっ飛んだじゃないですか。その後グワーっと立て直していった時に、江戸時代から脈々と続くオリジナルなものを残しつつも、洋楽もK-POPも宗教でもなんでも新しい文化をどんどん取り入れていったと思うんです。（中略）そういうカルチャーが俺の考える「東京っぽさ」で、ALIはそれを受け継いでいると思っています」とした。

また、ALIが注目されるきっかけとなった楽曲『Wild Side』（ワイルド・サイド）では、「人種間のいがみ合い」や「ハーフの問題」について取り入れ、「現実の社会に投影させて（censor（検閲）されるかもif I keep singing, keep rapping, keep telling the truth like Malcolm X（マルコムXのように、本当のことを歌ったり、ラップしたり、口に出したりしたら）」という歌詞にしています」と語った。

インタビュー内で、「ハーフ」の当事者であるLEOは、多国籍な人たちが集まっていることを「東京っぽい」と表現している。少なくともALIメンバーにとって、日本の都市はすでに人種的・民族的マイノリティが存在し、そうしたマイノリティの文化が日本の民俗として取り込まれている現状を実体験として感じられていることがうかがえる。そして、マイノリティである「ハーフ」当事者としての実体験を、メンバーの人種や音楽性にまつわる文化的なルーツに基づくメロディーに乗せ、多言語を使用し、音楽という芸術に落とし込んでいることが理解できる。

マイノリティによる芸術分野の表現活動は、この社会がすでにマイノリティの民俗を含んだ上で存在しているという実態を社会に向けて開示する。

そして、マイノリティにとっても芸術は自身が生きる文化とその生活に基づく感情や感覚を表現する手段として重要視されており、それにより個人の持つ伝承や知恵をコミュニティに還元し、あるいは表現を通してマジョリティにも共感と連帯を呼びかけることが可能な活動だとされていることが読み取れた。そしてその社会で確かに生きている生活者を「常民」とみなさず、その民俗をその社会の民俗史に含めないことは、その社会に実際には存在する特定の民俗をその社会の歴史の実態から意図的に取りこぼす行為であることも明らかになったと言えるだろう。

Ⅲ 考察

1 規範の再構築

フランク・カロは「再定義されたフォークロア」で、「フォークロアは、芸術などの非フォーク的な文脈の中に変換されたり、移されたりする」と述べている [Turner 2021]。ときに異端的な見解は日常的実践ではない他の手段を通じて発信されることがあり、経済的／政治的／社会的な力の変化への抵抗など、文化のシステム内の出来事を表現・実践するための一手段として芸術があるからである。芸術の中に人々の営みや伝承といったフォークロアが置換されているのならば、芸術活動もまた民俗学の研究対象となり得る。特に近代芸術は、特定の階級が嗜む教養としての芸術としての側面から離れ、その多くが市井の人々による実践である⁸⁾。また、マイノリティの生活実践と芸術活動は、第Ⅱ章で挙げた例からも、密接であると推測できる。マイノリティ当事者による芸術を考察することにより、歴史の大きな流れや社会から取りこぼされてきた性的マイノリティや人種・民族的マイノリティの民俗を、その表現や共有のされ方から読み取ることがより可能になるのである。

現在主流な芸術文化において、マイノリティの表象は決して多くない。それは、表象にその社会における存在可視化の機能がある以上、マイノリティにとって社会における存在の否定や居場所の欠如と直結した問題ともなる。マイノリティは絵画や音楽、小説、映画、ポップカルチャーなどの芸術から、

ときにマジョリティから「過剰な深読み」だと否定されつつも、あらゆる行間を読み取りながら自身の存在を歴史ひいては社会の中に見出す必要がある。故に、性的マイノリティのコミュニティに根付いてきた「クィア・リーディング」のように、解釈の可能性を探り、ときに読み替え、芸術の中に「クィアネス」を見出すことで自身の表象を間接的に得る、または自身の存在可能な居場所を見出す試みが存在しているのである。そうした社会において、行間を読み取らずとも認識可能な、そしてステレオタイプではない、明確な「クィアな表象」は、「性的マイノリティの人々が“どんな物語”にも存在し得る」という生活実践たる「クィア・リーディング」を肯定し、彼らが「ただ存在しているだけではなく、抑圧に打ち勝ちながらアイデンティティを強固にしてきた」という歴史を、社会と当事者に提示する [Laman 2022]。社会の差別構造に基づくステレオタイプではない、自身と同じ属性の表象、自身を投影可能な表象は、性的マイノリティだけでなくあらゆる人々に対して、自身の存在を社会の中で可視化すると同時に、この社会の一員であると肯定する役割を果たす。

白井雅美は、イギリスにおけるブラック・ブリティッシュの表現活動の研究から、その国においてマイノリティとされる属性の当事者による芸術の歴史を「欠落の歴史」[白井 2022: 144] と分析する。マイノリティによる物語は、表現者の職業や表現体系のジャンルを問わず一貫して政治的であり、その社会の歴史を表象しており、マイノリティにとって自分を語る事は、歴史・コミュニティ・家族・仲間を語ることであり、トラウマを克服することであり、自分を取り戻すことでもあるとされる [白井 2022: 198-201]。周縁化された人々の芸術から当事者の生活実践と伝承という民俗を読み取り、それを民俗史に位置付け直していくことは、欠落している既存の歴史を民俗史から再構築するために必要な過程である。

ここで、人権活動家であり俳優のリズ・アーメッド (Riz Ahmed) のエッセイを引用する。アーメッドはまさに、西洋社会をマイノリティであるムスリムとして生きつつ、映像芸術に携わることで、自身の属性に強制的に紐付けられた社会側からの物語を、当事者側から「語り直す」ための活動をして

いる一人である。アーメッドは、マイノリティ表象の最終的な目標を、人種・民族的マイノリティの当事者である自身がステレオタイプと無関係な「ただの男」を演じられることだとして、マイノリティの表象を「レットルがぶら下がったネックレス」に例えて以下のように述べる。

「私が役者になった理由のひとつは、こうしたネックレスを引き伸ばせるかもしれない、そうならば十代の自分はもう少しは息をしやすくなるかもしれないとの希望だった。(中略) 私はエスニック・マイノリティの表象は段階的にしか改善されないと認識し、それゆえ長丁場になることを覚悟しなければならなかった。第一段階は、平板なステレオタイプである——小型タクシーの運転手、テロリスト、雑貨屋（コーナーショップ）の店主などである。これはネックレスを窮屈なものにする。第二段階は、既成概念を覆す描写で、これはエスニシティを踏まえた範囲内でなされるものであるとはいえ、ステレオタイプへの挑戦を目指している。これはネックレスを緩めてくれる。そして第三段階が希望の地で、そこで私が演じるキャラクターの物語は、彼の人種と本質的な結びつきを持つ事は無い。希望の地では、私はテロの容疑者でも強制結婚の犠牲者でもない。希望の地では私の名前がデイクになりさえするかもしれない。希望の地には、もうネックレスは存在しない」[アーメッド 2019]

マイノリティは多くの人々がマジョリティと同じく実態として社会の中で生活を営む市民であるが、存在を認識されることと有徴化が歴史的に結び付いてしまっていることから、表現される際に「常民」として存在することが困難である。現に、引用したエッセイが発表された2016年時点では、アーメッドは俳優として存在を認識される際に、「ただの男」として登場することを社会から許されていなかった。アーメッドは、そうした現状に抗うために、ムスリム男性である自分が「ただの男」として社会に存在しているという様を表現するために俳優となった。周縁化による結果として有徴化されたステレオタイプではなく、マイノリティである自身を「ただの男」として表象する

ため、芸術の道に進んだのである。

芸術の中に自身の存在を見出す経験を生存のために渴望する人がいることを、マイノリティはその実体験から、マジョリティよりも比較的深刻に認識しているといえる。そのため、マイノリティの表現者は自身の生活実践や感情といった民俗を、自身にとっての「普通」の人生を、鑑賞者となる他の当事者やコミュニティへの連帯のために、そして周縁化に抵抗し存在を表明するため、生存の権利を獲得するため、意識的に芸術に落とし込む場合が多いのである。マイノリティによる芸術は、マイノリティの民俗を内包しており、それは社会において「普通」とされる規範への異議申し立ての側面を少なからず持つ。

マイノリティの当事者による芸術は、マイノリティにとって、自身を語り直す力を手に入れる手段であり、社会を変革していく手段として機能する。マイノリティによる芸術が語り直すのは、この社会で生きる自身の生活史や、コミュニティの伝承であり、その蓄積は「常民」の枠組みを少しずつ拡張させる。マイノリティの民俗を反映した民俗史は、周縁化された人々の民俗から社会の規範や歴史を再構築する可能性が、より開かれているのである。

2 クィア理論から読み解く

民間伝承や神話体系そしてそれに係る表現を民俗学や文化人類学が民俗史として研究範囲とするならば、現在盛んに発信されているマイノリティの表現者による芸術は、まさに新たな、そして見落とされてきたこの社会の伝承と文化であり、民俗史の一面なのである。こうした芸術に含蓄されるマイノリティの民俗を読み解き、そこにある当事者の知識と経験を民俗研究に位置付けるにあたり、「クィア理論」がその助けとなるだろう。

クィア理論とは、性的マイノリティの実践や文化、思想、歴史を研究する分野で登場した理論である。これは、異性愛中心主義など磐石な社会規範を解体することを目指した当事者による権利運動の中で誕生し、これまで研究の客体とされてきた性的マイノリティが主体的に自らの実践や文化を研究することで展開されてきた。クィアという言葉は「奇妙」という意味があり、

長らく性的マイノリティへの侮蔑語として使用されてきたが、後に性的マイノリティがクィアという言葉、誇りをもって「奪い返し」、そして自分たちを「奇妙」として排除する社会の「普通」という枠組みへの異議申し立てを行う運動の中で、コミュニティに根付いた言葉である [荒木 2019]。そうした権利運動の歴史の中で、クィア理論は性的マイノリティだけでなく、コミュニティ内に存在する移民などの人種・民族的マイノリティとの連帯の必要性を認識⁹⁾し、周縁化される多様なマイノリティを包摂し得る理論として展開してきた。クィア理論は、本質主義的な「普通」への徹底的な懐疑を視座に、マイノリティ同士の差異の肯定と連帯に寄与することを目的とした、規範の再構築あるいは脱構築のための理論であるといえる。

クィア理論は、支配的な社会的・政治的関係のあらゆる形態に疑問を投げかけ、マジョリティの文化が「本物／真実」と定めたものを否認する [Muñoz 1999 : 196]。そしてクィア理論は、「反同化主義であると同時に反分離主義」 [Sedgwick 1993] であり、多種多様なマイノリティを十把一絡げに扱うことによる差別構造の過小評価に抵抗するための差異の肯定という視点と、マイノリティの周縁化による格差の再生産に抵抗するための連帯の視点を持ち合わせる。クィア理論は、「覇権主義を相対化し、批判する姿勢を強く持ち、強い立場にあるもの、自らを『主流』『中心』の立場にあると信じ、自分たちの論理を普遍的なものとして押しつけてくるものに対し、それとは異なる位相から、それらを相対化したり超克したりしうる知見を生み出そうとする」学問である民俗学 [島村 2022] と非常に近い学問的目的を持つ理論であり、その民俗学から誕生した「人々の生活文化史や伝統・伝承を以って既存の歴史を再構築しようとするための用語」である「常民」概念を、再構築の面で補強する理論であるといえる。

個別の物語には普遍とされる社会の規範的なカテゴリを揺るがす可変力がある。それぞれの人が多様な生活と現実を語り、表現することは、自身の属性に向けられる定型的な視線つまり物語を少しずつ「ずれ」させる作用を持つ [岩川 2022 : 31]。歴史から欠落させられてきたトラウマの面を持つマイノリティによる芸術のように、「トラウマをめぐる物語が伝えようとするの

は、語ることすらできなかつた出来事、歴史のなかに上手く位置づけられなかつた記憶をいかに聞くかということ」[岩川 2022: 394]である。マイノリティによる芸術、そしてそこから読み取れるマイノリティの民俗は、あらゆる規範を問直し歴史の再構築を促す可能性を常に有している。

マイノリティによる芸術が既存の歴史を再構築した近年の事例として、音楽家のリナ・サワヤマ (Rina Sawayama) の活動をあげる。日本国籍を持つ日本人でありながら主にイギリスで活動する歌手のリナ・サワヤマは、2020年にイギリスでアルバム『SAWAYAMA』を発売した。このアルバムにはサワヤマの個人的な経験をもとにした曲が組み込まれており、イギリス生活において日本人として軽んじられたエピソードを元に制作された曲「STFU！」(筆者試訳:「黙れ!」)や、自身もパンセクシュアル(全性愛者)であることから性的マイノリティのコミュニティに贈る曲「Chosen Family」(チョーズン・ファミリー)などがある。このアルバムは世界で1億回超ストリーミング再生され、その年のイギリスの音楽アワードに選考されることが確実視されていたが、英国レコード産業協会はサワヤマがイギリス国籍でないことを理由に候補に選出しなかつた。これに対し、サワヤマが2020年7月にSNS上で「私はここに25年住んでいるというのに十分にブリティッシュ(英国人/英国的)ではないと判断され、2大音楽賞の受賞資格すらない」と問題提起を行ったところ、サワヤマを支持する声上がり、選考拒否は不当だとする抗議活動「#SawayamaIsBritish(サワヤマはブリティッシュ)」がSNS上を起点として行われた¹⁰⁾。その結果、英国レコード産業協会は受賞資格から「英国籍であること」という条件を外すことを決め、サワヤマは後に一つのアワードにノミネートされた¹¹⁾。

この事例では、サワヤマによるイギリス社会におけるマイノリティとしての民俗を落とし込んだ芸術が、「ブリティッシュ」や「イギリス音楽史」という規範のカテゴリを大きく「ずれ」させることに成功している。イギリスにおけるマイノリティ当事者として表現されたサワヤマの芸術は、「サワヤマはブリティッシュ」のスローガンに表れているようにイギリスの民俗としてすでに存在していた実態があり、性的マイノリティそして人種・民族的マイノ

リティの当事者たちを含めた多くの人々による異議申し立てが、権威による一方的な線引きに基づく決定を揺るがし、既存の歴史を再構築したのである。既存の歴史が再構築される際に、その中でイギリスにおける「ブリティッシュ」概念が拡張されていること、そして、歴史を再構築するための民俗史もまたマイノリティの民俗を包括することで再構築されていることが、クエア理論により分析できる。

日本もまた、様々なマイノリティを含む多様な人々が生活しており、そうしたマイノリティの民俗が日本の民俗の一面を担っている。そして、第二章で挙げた事例からもわかるように、マイノリティによる自らの民俗を落とし込んだ芸術はすでに多数存在し、規範のカテゴリを少しずつ、しかし確かに拡張・変革している。こうした現状を民俗研究の一環として捉え、日本の民俗の実態を把握し、歴史の再構築を図る必要があるのである。その際、マイノリティの実践から社会規範そして既存の歴史への異議申し立てと再構築あるいは脱構築を試みることに特化した、差異を肯定するクエア理論が必要となる。クエア理論は、マイノリティとされる人々の文化を民俗史として分析する際に再周縁化や同化の回避を含めた必要な視点を補い、既存の規範や歴史の拡張と再構築がどのように展開するのかを分析するときに、必須といえる理論なのである。

既存の男性中心的な歴史の再構築を目指し、女性の営みを「常民」として研究するにあたり、性差別の撤廃を目的とし性差別的な視点の解消に特化した思想／理論であるフェミニズムという視座が導入されたことは先に述べた。同じように、現代社会でマイノリティとされる人々の営みを民俗史に位置付け既存の歴史を再構築しようと試みるとき、マイノリティの周縁化を再生産しないため、既存社会に対する異議申し立てとして働くマイノリティの民俗が起こす再構築の展開を理解するために、クエア理論の導入が必要になるだろう。

おわりに

本稿は、社会的・文化的マイノリティとされる人々の文化や生活実践と

いった民俗を日本の民俗研究に位置付けることを試みるものであった。そして、「常民」概念を拡張の可能性を問うと共に、クィア理論を導入する必要性を論じることを目的とした。

社会的・歴史的に周縁化されているマイノリティを「常民」に含むことは、マイノリティをこの社会の「常民」ではなく「他者」として周縁に位置付け続けることへの批判であり、学問分野からのマイノリティの人権回復という社会的側面を持つ。同時に、マイノリティの人々をこの社会の「常民」とみなし、その民俗を民俗史に包摂することは、既存の歴史の「欠落」を補うという点で学問的にも意義があり、民俗研究にとって必須の課題であると筆者は考える。

第Ⅰ章では、従来の「常民」概念の中に、性的マイノリティや人種・民族的マイノリティが位置付けられていないことを指摘し、「常民」概念の拡張の必要性を論じた。また、マイノリティの民俗が芸術活動にも落とし込まれていることについて先行研究から確認した。第Ⅱ章では、日本におけるマイノリティによる芸術活動について、性的マイノリティの事例と人種・民族的マイノリティの事例を紹介した。第Ⅲ章では、クィア理論を援用して、芸術に落とし込まれたマイノリティの民俗が、マイノリティの人々の存在表明や連帯として機能していることを明らかにした。このことから、マイノリティの民俗を日本の民俗研究に位置付けることが、既存の歴史の再構築となり、「常民」概念の拡張となることを、クィア理論の視座から予備的に分析した。

民俗研究はながらく、歴史的に周縁化されてきた人々、被差別者などの社会的・文化的マイノリティの生活をも含めた民俗を研究し、それらを歴史の中に位置付ける試みを行ってきたはずである。本稿は、現代の社会において周縁化されているマイノリティの生活を、当事者の日々の生活実践に加えてマイノリティによる芸術活動からも読み解き、日本の民俗研究に正当に位置付ける必要があることを論じたものである。従って本稿は、社会的・文化的マイノリティを包摂するという意味で、「常民」概念を拡張していると言える。これまで社会および歴史から周縁化されてきた人々の営みを包摂することは、民俗史がより多様な「人間の知恵と判断」を内包するための試みであ

る。そしてこれは、民俗史および民俗研究の意義である「そこに生きる（または生きた）常民の生活文化史を明らかにし、その伝統や伝承を以て既存の歴史を再構築する」という学問的目的を、より忠実に達成するために今もつとも必要な理論的・方法論的な転回の一つであると筆者は考える。

注

- 1) Deborah Solomon, "Kehinde Wiley Puts a Classical Spin on His Contemporary Subjects", Jan. 28, 2015.
<https://www.nytimes.com/2015/02/01/arts/design/kehinde-wiley-puts-a-classical-spin-on-his-contemporary-subjects.html> (2022/10/18 閲覧)
- 2) 「物語はなぜ必要なのか? 『阿媽的 girlfriend』の企画責任者の略飛さんより」『おばあちゃんのガールフレンド』 https://greenfunding.jp/thousandsofbooks/projects/6228/activities/23977?planner_id=39423&project_id=6228 (2022/08/30 閲覧)
- 3) 映画『片袖の魚』公式サイト <https://redfish.jp/> (2022/10/18 閲覧)
- 4) 「ポストもの派」 芸術家の保科氏「水墨芸術に現代の息吹を」 人民網日本語版 2016年02月17日 15:57 <http://j.people.com.cn/n3/2016/0217/c94473-9017971.html> (2022/10/15 閲覧)
- 5) 「バクちゃん」 増村十七さんインタビュー 宇宙から来た移民? SF チックに描く日本の現実、好書好日 2020.08.14
<https://book.asahi.com/article/13612153> (2022/10/10 閲覧)
- 6) 「Kompu Satke Menoko 一昆布干し女一」 マルゑる録製 <https://www.maruyeyi.com/webinar-registration> (2022/08/30 閲覧)
- 7) 「音楽万歳 東京・渋谷発多国籍バンド ALL」 <https://www.wwdjapan.com/articles/883448>, WWD JAPAN, 2019/06/20 公開 (2022/10/19 閲覧)
- 8) "MoMA What is modern art", MoMA. https://www.moma.org/learn/moma_learning/themes/what-is-modern-art/ (2022年10月18日閲覧)
- 9) 90年代、クィア理論を誕生させ発展させつつあった性的マイノリティの権利運動は、「エイズ・パニック」に直面する。エイズは発見された当初、同性愛者やトランスジェンダーといった性的マイノリティだけがなる病気だと認識され、社会から治療を放置された。性的コミュニティは、これに対し「アクト・アップ (Act Up)」という社会に存在表明をする抗議運動を開始する。性的マイノリティが普通に存在する隣人であることを示すため、公共の場で同性同士キスしてみせたり、教会や道端で「ダイ・イン」という死体になりきる抗議活動などを行った。こうした運動による啓蒙と共に進んだ研究により、全ての人にエイズに感染する可能性があるのだと明らかになってからは、また別の排除が発生する。エイズ治療の治

験が、白人のみを対象に行われたのである。これにより、多くの有色人種が、人種を理由に、見捨てられる形で命を落とした。また、治療薬が製薬会社によって高価格に設定され、元より経済的困難に陥りやすいマイノリティは、治療の場からさらに排除されていた。これらの出来事に対し、「アクト・アップ」は、排除され死んでいった仲間の遺灰を公共の場に撒き、死んだ仲間の遺体を市役所などに運び来むという抗議を行う。周縁化され語ることの出来なくなった死者を、公の場に可視化させることで意図的に衝撃を以て社会に「人が死んでいる」ことを訴えかけたのである。コミュニティから出た死者が有色人種そして貧困層に偏っていたことは、権利運動の途上で見過ごすことの出来ないものであった〔新ヶ江 2022：170-185〕。「クィアの連帯」は、性的マイノリティの権利というワンイシューだけでは成し遂げられないことを、コミュニティは突きつけられたのである。性的マイノリティのコミュニティに存在する人種・民族的マイノリティや経済的マイノリティ、あるいは身体的マイノリティを内包し、それらの権利も共に訴えてこそ、クィアな連帯がなされることが認識された。そして、これがクィア理論にも反映されているのである。日本でも、「エイズ・パニック」が性的マイノリティに対する偏見だけでなく、諸外国または人種への偏見を含むものであることは認識されており、性的マイノリティの人権運動は人種・民族的マイノリティの人権運動とも連帯しつつ行われてきた〔風間、河口 2010：32-36〕。

- 10) これはサワヤマが人種・民族的マイノリティとして直面した問題であるが、サワヤマが受けた人種的排除に対する抗議の中心には性的マイノリティのコミュニティ（ゲイを公表しているイギリスの歌手エルトン・ジョンも抗議人として積極的に参加していた）があり、抗議者の人々の中には性的マイノリティが含まれると考えられる。ここには、運動におけるインターセクショナリティ（交差性）の思想も読み取れることを指摘しておく。
- 11) 「英音楽賞、国籍条件で問題提起 日本人歌手リナ・サワヤマさんに聞く」毎日新聞、2021/3/18 15：00（最終更新 4/16 09：23）2022/10/20 閲覧
<https://mainichi.jp/articles/20210318/k00/00m/030/065000c.amp>

参考文献

- Turner, Kay
2021 *Deep Folklore/Queer Folkloristics*, "Advancing Folkloristics", Indiana University Press
- Laman, Douglas
2022 *How 'Severance' and 'Our Flag Means Death' Deliver Unique and Thoughtful Queer Representation*, Collider, APR 07
<https://collider.com/severance-our-flag-means-death-queer-representation/>(2022/10/20 閲覧)
- Muñoz, José E.
1999 *Disidentifications: Queers of Color and the Performance of Politics*. Minneapolis: University

of Minnesota Press

Sedgwick, Eve Kosofsky

1993 *Tendencies*. Durham, NC: Duke University Press

赤枝加奈子

2011 『近代日本における女同士の親密な関係』角川学芸出版

荒木生

2021 「インターネット時代における性的マイノリティの「名乗り」と「名付け」——インターセクショナルリティと「ロマンティック」の観点から——」『常民文化』第44号、成城大学常民文化研究会：1-27

イン、イーシェン、カントー、リベイ・リンサンガン編 村上さつき訳

2022 『イン・ティア・タイム—アジアン・ティア作家短編集』ころから

飯田裕子、中谷いずみ、笹尾佳代編著

2022 『プロレタリア文学とジェンダー』青弓社

石原真衣

2020 『沈黙』の自伝的民族誌：サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版会

岩川ありさ

2022 『物語とトラウマ クィア・フェミニズム批評の可能性』青土社

岩本通弥編

2021 『民俗学の思考法 〈いま・ここ〉の日常と文化を考える』慶應義塾大学出版会

臼井雅美

2022 『ブラック・ブリティッシュ・カルチャー 英国に挑んだ黒人表現者たちの声』明石書店

折口信夫

2017 『被差別の民俗学』河出書房新社

金子遊

2018 『混血列島論：ポスト民俗学の試み』フィルムアート社

風間孝、河口和也

2010 『同性愛と異性愛』岩波新書

礪川全次

a. 2006 『異端の民俗学』河出書房

b. 2006 『ゲイの民俗学（歴史民俗学資料叢書 第3期）』批評社

佐野賢治

2008 「常民へのまなざし」11月10日、有隣堂

<https://www.yurindo.co.jp/yurin/13355/2>

新々江章友

2022 『クィア・アクティビズム：はじめて学ぶ〈クィア・スタディーズ〉のために』花伝社

新谷尚紀編著

2022 『民俗学がわかる事典』角川出版

杉浦郁子

2015 「『女性同性愛』言説をめぐる歴史的研究の展開と課題」『和光大学現代人間学部紀要』第8号、和光大学現代人間学部、7-26

砂川秀樹

2015 『新宿二丁目の文化人類学』太郎次郎社

鳥越皓之

2001 「常民と自然」『国立歴史民俗博物館研究報告』第87集、国立歴史民俗博物館

島村恭則

2020 『民俗学を生きる ヴァナキュラー研究への道』10p、晃洋書房

下地ローレンス吉孝

2018 『「混血」と「日本人」—ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社

曾士才

2020 『日本華僑社会の歴史と文化—地域の視点から』明石書店

田亀源五郎

2017 『ゲイ・カルチャーの未来へ』P ヴァイン

鶴理恵子

2015 「主婦は「職業」なのか？—主婦権と女性」『知って役立つ民俗学—現代社会への40の扉—』ミネルヴァ書房

堀江友里

2015 『レズビアン・アイデンティティーズ』洛北出版

三橋順子

2022 『歴史の中の多様な「性」—日本とアジア 変幻するセクシュアリティ』岩波書店

柳田國男

2017 『被差別民とはなにか 非常民の民俗学』河出書房新社

リズ・アーメッド

2019 (2016) 「空港とオーデイション」『よい移民 現代イギリスを生きる21人の物語』創元社、216-228

